

パリで『いきもの：江戸東京 動物たちとの暮らし』展

～江戸東京博物館所蔵 112 件、1 か月で約 6,000 名が来場、展示の様子をオンライン公開中～

国際交流基金 パリ日本文化会館は、2022 年 11 月 9 日から、東京都江戸東京博物館と共同で『いきもの：江戸東京 動物たちとの暮らし』展を開催しています。本展では、江戸・東京の人々といきもの暮らしの歴史と文化を、東京都江戸東京博物館の所蔵コレクションから紹介します。フランスで滅多に見ることのできない数々の貴重な作品全 112 件を集めた本展には、初日から多くの来場者が訪れ、「テーマが興味深く、日本の文化をより深く理解できる内容だった」、「日本ではずっと昔から人間社会と自然が共生してきたことがわかった」といった声が聞かれました。自然環境を保護し、人間と動物が共生できる社会を目指すことは、今日では世界共通の課題ですが、本展では、そのような社会が日本の江戸時代に既に実現していたことを示唆するような作品が数多く出品されています。このたび、より多くの人々が本展に触れることができるよう、会場の様子と、来場者へのインタビューをおさめた映像を当基金公式 Youtube チャンネル <https://youtu.be/B5iZxZfT2Is> に公開しました。



©パリ日本文化会館/澤田博之

一般公開に先立ち 11 月 8 日に行われたオープニング記念講演会には、小山周子氏（東京都江戸東京博物館学芸員）、フランソワ・ラショー氏（フランス国立極東学院教授）が登壇しました。小山氏が、江戸時代の鹿、馬、犬、鳥、ネズミ、象などの動物と人間の暮らしぶりを解説した後、ラショー氏が独自の視点から、日本人と動物の関わりについて深く切り込んだ質問を小山氏に投げかけ、活発な議論が行われました。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

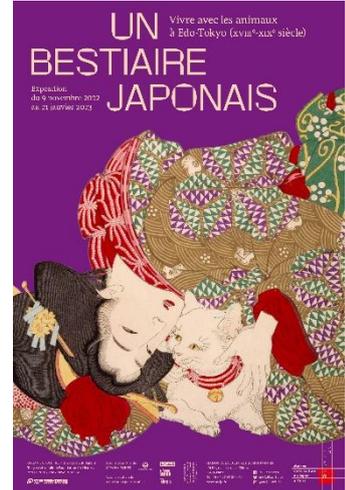
【来場者の声】

- ・さまざまな動物と日本人がどのような関係を築いてきたか、それをどのように表現してきたか、よくわかった。
- ・すばらしい展覧会だった。どの作品でも人間や動物が生き生きと描かれ、ユーモアが感じられる。
- ・コロナ以来 3 年間も日本に行くことができない中、日本からフランスへ作品の方から来てくれたことが嬉しい。
- ・日本では自然との関係が伝統や文化の中心にあると感じた。日本ではずっと昔から人間社会と自然が共生してきたことがわかった。
- ・産業化が進み、人間と動物の調和が消えかけている現代社会に必要な展覧会であると感じた。
- ・解説が豊富で、わかりやすく、日本の文化を理解することができた。浮世絵だけでなく、日用品などが展示物の中にあっただのも、とても興味深かった。
- ・情報量が多く、たくさんの方が学べる展覧会だった。日本文化をもっと知りたくなった。

【展示構成とみどころ】

プロローグ：外国人が見た日本人といきもの

フランス人画家ビゴーが描いた作品と、アメリカ人動物学者モースの言葉を紹介し、外国人が印象的に見た江戸・東京の人々と動物の関係性を紹介し、本展の導入とします。



パリ日本文化会館 本展ポスター

第 1 章 江戸のいきもの～「江戸図屏風」の動物を探してみよう

1634 年頃に 3 代将軍家光のために描かれたといわれる「江戸図屏風」には、動物の姿も描かれています。江戸での人々と動物の関わりを探っていきます。



中天竺新渡舶来大象之図 了古画 東京都江戸東京博物館蔵

第 2 章 飼育されるいきもの

本章では、江戸・東京人々の暮らしで密接な存在であった、馬や牛などの働くいきものと愛玩用に飼われるようになった小動物を紹介します。

第 3 章 野生のいきもの

江戸時代以降、江戸は巨大都市として開発が進んでいましたが、近郊には野生のいきものが現代よりも多く生息していました。四季折々の鳥や虫を見るのも、庶民の楽しみの一つでした。

第 4 章 見られるいきもの～見世物から動物園へ

舶来のゾウやラクダなどの動物は見世物で大人気となり、珍しい鳥や鹿を見る花鳥茶屋なども盛り場に開設されました。明治時代以降には、東京にも動物園や水族館が開設されました。



当世名兔揃 東京都江戸東京博物館蔵

第 5 章 デザインのなかのいきもの

人々の暮らしのなかの衣装や道具には、さまざまな動物が吉祥のデザインとして使われています。また子どものおもちゃには、今も昔も動物のモチーフがとり入れられています。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

【展覧会概要】

展覧会名	UN BESTIAIRE JAPONAIS VIVRE AVEC LES ANIMAUX À EDO-TOKYO (XVIIIIE-XIXE SIÈCLE) いきもの：江戸東京 動物たちとの暮らし
会期	2022年11月9日(水)～2023年1月21日(土)
会場	パリ日本文化会館展示ホール (101bis quai Jacques Chirac 75015 Paris France)
開館時間	火～土曜日 11時～19時、木曜日のみ 11時～21時
休館日	日・月・年末年始
主催	独立行政法人国際交流基金 パリ日本文化会館 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
協力	日本航空株式会社、パリ日本文化会館支援協会
観覧料	一般 5€、割引 3€
図録	パリ日本文化会館地上受付、オンラインで販売中 22€、判型 16.5×24cm、160ページ、全文仏語 発行：2022年11月 出版：Éditions Gourcuff Gradenigo、パリ日本文化会館 テキスト：小山周子（東京都江戸東京博物館学芸員）、西村直子（同左）、川口友子（同左）、フランソワ・ラショー（フランス国立極東学院教授）

【配布画像】



©パリ日本文化会館/澤田博之

以上

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、原田）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp